

『悟性論』の成立について

——「心」の解釈を中心として——

通

然

一 はじめに

周知の通り、『菩提達磨悟性論』（以下『悟性論』）は、達磨の著作として円珍（八一四—八九二）によつて日本に將來され（『大正』五五、一〇九五頁上）、『達磨大師三論』や『少室六門』に収録されているが、一般には達磨の真撰ではなく、中唐期に禪宗の中のある一派が、自らの思想や禪法を達磨の正系として宣揚するため、初祖達磨の名に仮託して撰述したものであると考えられている。従つて、本書は初期禪宗思想の發展を考える上で、極めて重要な位置を占めている。

しかし、『悟性論』に関する研究は必ずしも十分ではない。管見の及ぶ限りでは、常盤（一九三三）と柳田（一九八五）のものがあるにすぎない。常盤氏は『悟性論』は思想の上において『六祖壇經』よりも一層円熟し、南宗禪の完成思想が表現されたものと指摘している。一方、柳田氏は『悟性論』が北宗禪の再編と共に成立したとし、それを神秀・普寂系に

歸される『觀心論』と馬祖直前と見られる『血脉論』の間に位置付けているが、両氏はいずれもその内容について充分には論じておらず、今なお不明瞭な部分が多く残っており、『悟性論』が北宗によるテキストか、南宗によるテキストかを断言するには至っていない。そこで、本論では研究の一環として『悟性論』における「心」の解釈をめぐつて、『悟性論』と『二入四行論長卷子』『觀心論』との密接な關係を指摘し、その成立の一端を明らかにすることにした。

二 『悟性論』と『二入四行論長卷子』との関連

『悟性論』の内容を概観すれば、ひたすら「心」の問題を追求しており、例えば「三界の生滅」や「仏道を求めること」「八万四千の法門」などは、全て「心」によるとされているのである。では、『悟性論』における「心」は、いったいどう理解すればよいのであろうか。それが、次のように定義されている。

凡言一法(心)者、似破瓦石竹木無情之物。若知心是假名、無有實體、即知自家之心、亦是非有、亦是非無。何以故。凡夫一向生心名為小乘一向滅心名為無、菩薩與佛未曾生心、未曾滅心、名為非有非無心。非有非無心、此名為中道。

(椎名「一九七七」、一九〇—一九一頁)

ここでは、まず「心」が仮名であり、実体がないと説き、「心」を凡夫の「有心」、小乗の「無心」、菩薩と仏の「非有非無心」という三種に分け、非有非無心を「中道」とも呼んでいる。このような心の捉え方は、『二入四行論長卷子』(以下『長卷子』)に由来すると考えられる。

問、何名一切法非有非無。答、心體無體是法體。心非色故非有、用而不廢故非無。復次、用而常空故非有、空而常用故非無。復次、無自性故非有、從緣起故非無。凡夫住有、小乘住無、菩薩不住有無、是自心計妄想。

(柳田「一九六九」、一八八頁)

『長卷子』では、心が一切法の根本であるということをも前提として、心の体が無体であると論じており、それが非有非無であると言っている。『悟性論』に「知心是假名、無有實體」とあるのは、『長卷子』によるのであろう。また『長卷子』で、凡夫の心は有の世界にとどまり、小乗の心は無の世界にとどまり、菩薩の心は有にも無にもとどまらぬと説いているのは、右に引いた『悟性論』と、全く同じ認識に立っていることが明らかである。これと同じ用例は、『長卷子』の

『悟性論』の成立について(通)

第六十七段にも見られる(柳田「一九六九」、二三五頁)。更に、『悟性論』の撰者が『長卷子』を意識している箇所を、他にも指摘できる(柳田「一九八五」、二七〇—二七二頁)。このように、『悟性論』における『長卷子』重視の傾向が知られる。

三 『悟性論』と『観心論』との関連

『悟性論』は、「心」とその捉え方については次のように説いている。これは『悟性論』の思想を理解する上でも、最も重要な主張である。

無妄想時、一心是一佛國。有妄想時、一心是一地獄。衆生造作妄想、以心生心、故常在地獄。菩薩觀察妄想、不以心生心、常在佛國。若一念心起、則有善惡二業、有天堂地獄。若一念心不起、即無善惡二業、亦無天堂地獄。心中有三毒者、是名國土穢惡。心中無三毒者、是名國土清淨。不淨穢惡者、即無明三毒是。諸佛世尊、即清淨覺悟心是。

(椎名「一九七七」、一九二頁)

ここでとりわけ注目されるのは、「心」を「無明三毒の心」と「清淨覺悟の心」との二つに分けている点である。『悟性論』は、衆生は「妄想の有無」「心の起動」によって仏国と地獄の差別が生ずるとする。思想としては『維摩經』や『起信論』の取意と見てさしつかえないが、禪宗の場合から考えると、北宗文献である『観心論』の方が近いであろう。

『悟性論』の成立について（通）

問、云何觀心稱之爲了。答、菩薩摩訶薩、行深般若波羅蜜多時、了四大五陰本空無我、了見自心起用有二種差別。云何爲二。一者淨心、二者染心：淨心恆樂善因、染體常思惡業。若眞如自覺、不受所染、則稱之爲聖、遂能遠離諸苦、證涅槃樂。若隨染心造業、受其纏縛、則名之爲凡、於是沉淪三界、受種種苦。

（椎名「一九七七」、一九七頁）

つまり、「心」には「淨心」と「染心」があり、前者は善因、後者は惡業を起こすという。そして、眞如の淨心を自覺し、染心にそまることがなければ聖者であり、諸々の苦を離れて涅槃の樂を得るが、無明の染心に従つて惡業を造れば、本來の淨心が覆われて凡夫となつてしまい、三界輪廻の苦を受けなければならぬ。『悟性論』がこうした思想を受けているのは明らかであろう。

また、『悟性論』には、「迷」と「悟」の問題を扱った箇所が多い。これらをまとめれば、次の如くである（引用箇所は、椎名「一九七七」の頁数と行数で示す）。

- ①「凡將心求法者爲迷、不將心求法者爲悟」（一九〇・七）
- ②「迷時有此岸、若悟時無此岸」（一九〇・九）
- ③「煩惱名衆生、悟解名菩提、亦不一不異、亦隔其迷悟耳。迷時有世間可出、悟時無世間可出」（一九〇・一一—一二）
- ④「迷時有罪、解時無罪。何以故。罪性空故。若迷時無罪見罪、若解時即無罪」（一九一・一八一—一九）
- ⑤「迷時六識五蘊、皆是煩惱生死法。悟時六識五蘊、皆是涅槃無生死

法。脩道人不外求道。何以故。知心是道」（一九一・二二—二三）

- ⑥「迷時有佛有法、悟時無佛無法」（一九二・二）
- ⑦「迷悟異境故、有衆生菩提二名矣」（一九三・一六一—一七）
- ⑧「若迷時佛度衆生、若悟時衆生度佛」（一九三・二二）

これらの内容は、すべて「迷」と「悟」の關係を示すものである。即ち、「迷」であれ「悟」であれ、一切の法は心によつて作り出されたものであるとされている。このような理論の展開は、『觀心論』が「心」を「淨心」と「染心」の両面から捉えたことに基づくと考えられる。この外、『悟性論』が『觀心論』の影響を受けたことを示すものとして、次の二つの文を挙げることができる。

- ①「貪爲欲界、瞋爲色界、癡爲無色界」（一九〇・一八一—九）
- ②「天女於十二季中求女相、了不可得。即知於十二季中求男相亦不可得。十二年者、即十二入是也」（一九三・六—七）

①の三界を三毒と対応させることは、『觀心論』にも見られる。②は『觀心論』に見出せないが、②と同じく付会的解釈によつて仏教の概念を説明している。このように「心觀釈」に主眼が置かれるのは、北宗禪の特徴である。

四 『悟性論』の成立について

『悟性論』の成立については明らかではないが、前に論じたことから、少なくとも『悟性論』が「心」に対して、「有」「無」「非有非無」や「浄」「染」と解釈することは、『長卷子』『観心論』といった初期の禅文献を前提として成立しているのである。だが、これまでの研究においては、『悟性論』が依拠した文献について十分には明らかにされてこなかったし、まして、それらの文献が依用された理由についてはまったく取り上げられてはいない。

『悟性論』の撰者は、本書を「達磨大師悟性論」と題して「達摩」の名を冠しており、また、禅の原思想を伝える『長卷子』を用いていることから、自らの思想や禅法を達摩の正系と位置付けようとする意図を持っていたと考えられる。こうした点は偶然ではなく、恐らく神会の北宗批判と関係するものである。『悟性論』が『観心論』で示される「浄心」と「染心」を思想基盤としており、また、両書は流伝の過程においても元来連写され、セットとして伝持されていた。更に、『悟性論』には『観心論』以外に、同じく北宗禅文献とされる『禅門経』からの引用も見られるが、『禅門経』は北宗禅の思想を権威づけるため、仏説の形で編集されたものとされている（柳田「二九六一」、八六九―八八二頁）。これらの諸

点から、『悟性論』は、北宗禅で撰述されたものである可能性が高いと考えられる。

以上の論述によって、恐らくは、神会の北宗批判（八世紀中葉）から円珍の日本将来（九世紀初頭）にかけてのある時期に北宗禅内で編まれたのが、この『悟性論』であったと考え、大過ないはずであるが、今後の課題として、『悟性論』を北宗禅文献と詳細に検討する必要がある。

〈参考文献〉

- 常盤大定「見性の思想的考察——達磨大師「血脈論」「悟性論」「観心論」を中心として——」『哲学』一一、一九三三
柳田聖山「禅門経について」『仏教史学論集』塚本博士頌寿記念会編、一九六一
柳田聖山「語録の歴史——禅文献の成立史的研究——」『東方学报』五七、一九八五
椎名宏雄「諸本対校『達磨大師三論』」『駒澤大学仏教学部論集』八、一九七七
柳田聖山『達摩の語録』筑摩書房、一九六九

（本研究は平成三十年度仏教学術振興会による研究助成を受けたものである。）

〈キーワード〉 達摩、悟性論、二入四行論長卷子、観心論、北宗

（東洋大学大学院）